

# 『人間関係研究』 第21号の発行にあたって

今年度（2021年度）は、コロナ禍2年目となりました。読者の皆さまの多くは、仕事の仕方や他の人たちとの関わりの様子が、コロナ禍前に比べて大きく様変わりしたのではないのでしょうか？ 当センターの活動も大きく様変わりしました。公開講座はすべてオンラインで行われ、Tグループなどの合宿講座は中止せざるを得ませんでした。当センターの会議もすべてオンラインで行われました。本号には、「コロナ禍と私」というテーマで当センター研究員から寄せられたエッセイが9編掲載されています。新型コロナウイルス感染拡大が私たちの人間関係にどのような影響を及ぼしたのかについて、皆さまが思い巡らす機会になれば幸いです。

2021年度は当センターにとって悲しい出来事がありました。かねてから闘病されていた、センター研究員の坂中正義さんが2021年8月にご逝去されました。本号には、当センターでの坂中さんの活動や業績を掲載するとともに、センター員より寄せられた、坂中さんを偲ぶメッセージが6編掲載されています。在りし日の坂中さんを思い出していただき、ともに偲び、坂中さんのありようからともに学ぶことができればと思っています。

2022年1月には、元センター長の津村俊充さんがご逝去されました。津村俊充さんは、2004年4月から2014年3月までの10年間、センター長として本センターの活動を推進し、多大な貢献をされました。ここに記してご冥福をお祈りいたします。

本号には、投稿論文として、Tグループに関する実践報告が掲載されています。コロナ禍での合宿型Tグループ実施は困難で、このような時期に、通い型Tグループに関する実践報告を投稿いただけたこと、大変ありがたく、また、意味深く感じています。コロナ禍の中で、そして、新型コロナウイルス終息後において、日本におけるTグループをどのように存続し展開していくのかは、諸先輩から受け継いだTグループを実践する私たちにとって大きな課題です。Tグループを推進する実践者たちが分断されることなく、「人間性豊かな社会を創り出す」ことをともに目指しながら、今後の日本でのTグループやラボラトリー方式の体験学習の実践について対話し探究することが大切だと感じています。その意味でも、当センター以外の組織（大阪女学院大学）でのTグループ実践について本号に掲載させていただくことができたことは、分断ではなく、つながりや連携の象徴だと感じています。

ちなみに、本号（21号）は3月末に発行していますが、年度末の事務局負担の軽減を目指して、次号（22号）からは秋に発行することになりました。発行時期が変わりますが、「人間関係研究」の発行を継続していきますので、今後も引き続きお読みいただけると幸いです。

最後に、私は2022年3月をもって、4期8年のセンター長の役目が終わり、2022年4月からは新しいセンター長にバトンタッチすることになりました。8年間、人間関係研究センターを支えてくださった事務局の皆さん、研究員の皆さん、当センターをご支援いただいた皆さんに感謝申し上げます。

南山大学人間関係研究センター長 中 村 和 彦